

# 社会人基礎力を利用した海外体験学習の評価

—広島経済大学興動館「広島ハワイ文化交流  
プロジェクト」の場合—

田 中 泉

## 1. はじめに

本稿は、広島経済大学（以下、本学と略記する）の「興動館教育プログラム」を構成する「興動館プロジェクト」の1つである「広島ハワイ文化交流プロジェクト」を、海外体験学習として捉え、その意義と評価について検討するものである。

従来、日本の大学が実施している夏季や春季の長期休暇などを利用した海外研修といえば、もっぱら、現地の言語を習得するための短期語学研修やホームステイを体験する研修であった。その場合、海外の大学等の教育機関と提携関係を結んで、その教育機関が実施している研修プログラムをそのまま利用したものが多い。

しかし、近年、外国語習得やホームステイ以外の様々な海外体験学習活動をおこなう大学が増えてきている<sup>1)</sup>。その要因を、藤原孝章氏は、海外体験学習やスタディ・ツアーといった多様な学習内容をもったプログラムにおける参加者の学びが、アクティブ・ラーニング（活動的な学習）を通して育成される資質能力として、グローバルな市民性育成と関連づけて考えられるようになってきたためと捉えている。また、同氏は、海外体験学習によって獲得されるはずのグローバルな市民性、すなわちグローバル・ティズンシップに関して、教育の対象である学習者を、「ローカルからグローバルまで、グローバリゼーションによって相互接続された多元的、重

層的空間において、社会的で、公共的な課題を見つけ、課題解決の在り方を探究し、解決に向けた態度や価値観を身に付け、他の人々とともに行動できる人間」と定義している<sup>2)</sup>。

本学でも、2006年度より、後述する「興動館教育プログラム」を立ち上げ、その中で「興動館プロジェクト」と呼ばれる正課外の学生の主体的な学習活動を積極的に推進している。その中でも、海外（カンボジアやインドネシアなど）で活動や交流をするプロジェクトは参加希望の学生も増えつつある。また、「興動館教育プログラム」では、ただ活動を行うだけでなく、参加した学生がどのように成長しているかを明らかにするための評価を行っている。海外体験学習の評価は、大学教育における海外体験学習が単なる語学研修や観光旅行に留まらないため、かつ、グローバル化が進む社会で将来活躍するための人材を育成するためには不可欠な手段である。藤原氏も、海外体験学習を一時的な「ハネムーン効果」で終わらせないためにも、プログラムの提供者（教員）、参加者（学生）の双方にとっての「学びの評価の機会と手立て」の必要性を述べ、その評価基準であるルーブリックの利用を勧めている。本学の「興動館教育プログラム」の評価は、経産省が「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」と定義した「社会人基礎力」を取り入れ、本学オリジナルな「プログレスシート」を開発し、学生の成長度をルーブリックにより定量的に評価するシステムを構築し運用している。

そこで、本稿では、まず、本学の「興動館教育プログラム」・「興動館プロジェクト」の意義と「社会人基礎力」評価システム、および「広島ハワイ文化交流プロジェクト」の内容と経過をのべ、参加学生の成長についてその評価について分析したい。

## 2. 「興動館教育プログラム」について<sup>3)</sup>

本プログラムの教育目的は「ゼロから立ち上げる興動人」の育成であり、「ゼロから立ち上げる興動人」とは、「既成概念にとらわれない斬新な発想

と旺盛なチャレンジ精神、そして仲間と共同して何かを成し遂げることのできる力を備えた人材」のことで、体験を重視した学びを通じて、社会を生き抜いていく「人間力」を育てることを目的としている。この「人間力」は、「新しいことにチャレンジするための可能性を引き出す元気力」・「失敗を恐れずに挑戦する実行力を培う行動力」・「無から有を生み出す想像力を磨く企画力」・「他者と協力して目的を達成する力を獲得する共生力」という4つの力によって構成されているとされている。そして、このプログラムは、少人数で双方向の授業を行い、実践を通じて知識やスキルを身につける「興動館科目」と「興動館プロジェクト」に分かれている。「興動館科目」が正課科目であり、「自由選択科目」として卒業要件単位に含まれるのに対して、「興動館プロジェクト」は正課外の活動である。

「興動館プロジェクト」は、「国際交流・社会貢献・地域活性・経済活動などにおいて行動することによって実社会で必要な人間力を養い、学生たち自身が企画から実行まで全般にわたって主体的に活動することとで自らの成長につなげること」を目指している。一方、各プロジェクトには、コーディネータとして、学生たちをバックアップするためにアドヴァイスやサポートを行う教職員が1～3名ずつ配置されている。

新規に立ち上げるプロジェクトは、学生たちが、日常生活で感じたことや大学の授業で学んだこと、インターネットや新聞、テレビなどから得たことから問題意識を発想し、賛同してくれるメンバーを集めることから始まる。次に、その仲間たちで話し合いを重ねて意見を出し合い、活動目的・目標、解決すべき課題、解決の方向性を明確にしてゆく。その中で、メンバーの役割分担（リーダー、副リーダー、会計係など）、活動スケジュール、必要な物品や予算を決めて申請書（エントリーシート）を作成し、提出する。そして、この申請書をもとに、年1回（5月）のプロジェクト審査会でプレゼンテーションを行い、活動目的・内容、方向性、予算案を説明し、審査委員の教職員からの質問を受け応答する。ここでは、参加人数やメンバー構成、活動内容の整合性、独創性、社会への貢献度、学

内外への影響度などによって総合的に評価される。その評価に従って、興動館職員や教員によって構成される興動館運営委員会により、実績と人数に応じて、大学から各プロジェクトに援助される資金額の上限がある4つのカテゴリーのどれかに認定される。4つのカテゴリーとは、公認A（メンバーの人数50名以上、最高1000万円までの資金援助）、公認B（メンバーの人数20名以上、最高500万円までの資金援助）、準公認（メンバーの人数5名以上20名未満、最高100万円までの資金援助）、入門（メンバーの人数3名以上、最高5万円までの資金援助）である。このほか、「興動館教育プログラム」の創設当初から大学が主催する4つのプロジェクトがある。

「興動館プロジェクト」は、継続性も重視され、一度、設立が認定されたプロジェクトも、毎年、次の年度の活動目的・内容等を明確にした申請書を作成し、審査を受けることになっている。その結果、継続の可否とともに、カテゴリーの昇格や降格が決定される。プロジェクトの活動は、6月におこなわれる認定式を経て開始され、年度途中の9月には「中間ヒアリング」があり活動状況がチェックされる。また、12月には、プロジェクト活動報告会も開催される。活動開始時には、後述する「プログレスシート」に目標等を記入し、年度末の活動終了時に自己評価を記入し、成長の度合いを認識することになっている。

2017年度の、カテゴリーごとのプロジェクトの数は、公認A-3、公認B-7、準公認-5、入門-1、主催-4で、合計20のプロジェクトが活動している。過去11年の中では、一旦発足したものの、のちに消滅したプロジェクトもある。本稿で事例として取り上げる「広島ハワイ文化交流プロジェクト」は、2012年度に発足して以来、年度ごとのメンバーの人数が20人以下で、現在までカテゴリーとしてはずっと準公認のままであったが、2017年度は、20人を越え公認Bに昇格した。

### 3. 「広島ハワイ文化交流プロジェクト」(以下、「ハワイ・プロジェクト」と略記する)の活動内容

ハワイ・プロジェクトは、2012年度に本学の英語担当教員の山本貴裕教授が担当する「入門ゼミ(初年次ゼミ)」に所属した学生たちを中心に、発足した。山本教授は、アメリカ宗教史を専門とし、ハワイ大学マノア校(University of Hawaii at Manoa)で Visiting Scholar として1年間の在外研究の経験がある。学生たちは、入門ゼミで山本教授からハワイの話を聞いて、「ハワイで広島を宣伝するための何かをしたい」と調査のために春休みにハワイ・オアフ島に渡航した。この結果、「ハワイで広島のお好み焼きを焼いて人びとと交流する」プロジェクトを立ち上げることに決めた。以来、ハワイについて情報を集め、企画を練り、申請書を作成し、2013年5月のプロジェクト審査会に提出し認定された。以下、年度ごとの活動内容を述べる。

#### (1) 2013年度

プロジェクト審査会に提出した申請書では、「広島とハワイという歴史的なつながりを持つ二つの場所をつなぐ中心的な存在となることで、両地域間の国際交流を促進すること」を目的とした。この結果、準公認プロジェクトとして認定を受けた。コーディネータには、山本教授が就任した。この間、学生たちは、山本教授や他の教員からのアドバイスで、ハワイの日系人に注目し、日系人の多く住むハワイ島のヒロで活動することを決めた。そして、山本教授がハワイ大学ヒロ校(University of Hawaii at Hilo)で日本語を教えている広島市出身のH先生と連絡を取り、学生たちは渡航計画を練り上げていった。

2014年2月27日～3月7日に、2年生4人がハワイ島ヒロに渡航し、H先生の大学の日本語クラス、H先生が理事会メンバーであるハワイ日系人会館(Hawaii Japanese Center)で開催されたひな祭りイベント、ヒロ・ハイスクール(Hilo High School)のジャパン・クラブでお好み焼きを焼

いて、現地の人々と交流を行った。同時に、広島の若者に伝えるために、日系人社会について広島に関わることを取材した。特に、日系人社会の中で広島県出身者が多いという特異な位置を占めていることを知った。このような活動の中で、広島県人会やヒロ・ハイスクールの日本語担当教師で広島市出身のA先生などとの人脈ができ、次年度以降の活動に希望が持てることになった。

## (2) 2014年度

年度が替わり、新入生が4名加わり、メンバーは8名となった。また、筆者がコーディネータとして加わった。この年度の目的は、申請書によれば前年度の目的に加え、新たに「両地域の若者がローカルな条件を活かしつつ、グローバルな場で活躍できる『グローバル』な人間になるためのきっかけづくり」となっており、広島の若者とハワイの若者との連携を強める中で自分たちのグローバル・シティズンシップを成長させることを目標に掲げた。そこで、ハワイでは現在の広島を紹介するプレゼンを行い、また、広島の若者にハワイとの繋がりを認識してもらうために講演会を行ったり、動画を作成することを活動の中心に据えた。

まず、7月3日に、ヒロ・ハイスクールのA先生が広島の実家に帰省されたのを利用して、本学興動館の建物内にあるカフェで、「広島の若い女性に伝える国際交流」という題目で講演会を開き、S先生から、普通のOLがハワイの高校の教師になり家庭を築いたという自分の体験談と、それに関連して「国際交流に一步踏み出す勇氣」と「キャリアアップについて考えるきっかけ」を本学の女子学生たちに訴えかけていただいた。女子学生だけでなくハワイ・プロジェクトのメンバーも大きな刺激を受けたようである。

9月1日～9日に、8人のメンバーのうち、3年生2人と1年生3人がハワイ島に渡航し、ヒロで活動をおこなった。ヒロ・ハイスクールで「広島の今」をプレゼンしたのち、A先生、H先生のほか、本派本願寺ヒロ別院の輪番であるDさんなど広島県出身者に会い、「なぜ、広島からハワイに来たか?」、「ハワイでどのような活動をしているか?」、「広島の若者に

何を期待するか？」などを尋ねる様子を撮影し、帰国後プレゼン用ビデオを作成した。

続いて、2015年2月10日～18日には、1年生4人で、再びヒロに渡航し、東ハワイ広島県人会の総会、ハワイ大学ヒロ校のほか、ヒロ・ハイスクールと、同じくヒロにあるワイアケア・ハイスクール (Waiakea High School) で、宮島や原爆ドームなど広島の現在の様子や原爆の実相などについてプレゼンを行って交流した。

### (3) 2015年度

年度が替わり、新入生が5名加わり、メンバーは13名となった。この年度の目的は、申請書によれば、「広島とハワイの企業や学校と協力して広島の文化を広めるイベントをハワイで開催し、広島とハワイの新たな文化交流を起こす」となっている。

8月27～28日に、宮島にある本学の研修施設「成風館」で初めての合宿を行い、渡航での活動の準備を行い新入生との親睦をはかった。また、10月には、大学祭でハワイの特産であるコナ・コーヒーの販売を行ってプロジェクトのPRをおこなった。

2016年3月4日～16日に、2年生3人と1年生5人で渡航し、ハワイ島コナ (Kona) およびヒロで活動をおこなった。コナでは、コナワエナ・ミドルスクール (Konawaena Middle School) でハワイと広島の関係についてのプレゼンを行い、コナ広島県人会の総会でお好み焼きのパフォーマンスとプレゼンを行った。また、ヒロでは、ヒロ・ハイスクールでハワイと広島の関係についてのプレゼンを行い、ハワイ・コミュニティカレッジ (Hawaii Community College) で、シェフ養成コースの先生方や学生の協力によってお好み焼きのパフォーマンスを行った。

また、年度末で4年生4名が卒業し、プロジェクトから脱退した。

### (4) 2016年度

年度が替わり、新入生6名が加わり、メンバーは15名となった。この年度の目的は、申請書によれば、前年度に加えて「自分たちの企画したイベン

トで集めた収益金を使い、将来的にホームステイプログラムを実施し、若者にお互いの国に飛び出すきっかけをつくり、つながりを強固にする」とした。

まず、前年度に引き続き、8月31日～9月1日に「成風館」で合宿を行い渡航についての話し合いを行い、10月29日～30日の大学祭では、コナ・コーヒーに加え、ハワイの菓子であるマラサダをつくり販売した。さらに、12月初旬には、本学の近くのショッピングモール内で、プロジェクトの活動内容やハワイの日系人社会の様子を知らせる写真展を開催した。

2017年3月4日～16日に、2年生5人と1年生3人で、ハワイ島コナとヒロに加え、オアフ島のホノルルで活動をおこなった。コナワエナ・ミドルスクールとヒロ・ハイスクールの日本語クラスでは、日本の漢字の使い方や日本の若者が最近使っている言葉（ヤバイ、マジ、ソレナなど）の面白さをプレゼンし、好評であった。また、コナ広島県人会では広島からハワイへの移民の歴史についてのプレゼンを行った。ハワイ・コミュニティカレッジでは、シェフ養成コースの先生方や学生と、広島の料理（お好み焼き）とハワイ料理（カイルア・ビッグとロミ・サーモン）を一緒に作り交流した。さらに、ホノルルでは、カピオラニ・コミュニティカレッジでやはりシェフコースを訪問し、シェフ養成コースのT先生にお好み焼きについてプレゼンを行い、次年度以降の活動の可能性を広げた。

#### (5) ハワイ・プロジェクトの特徴

このハワイ・プロジェクトの渡航の特徴は、企画において学生が主体的に「何をいつどこで、どのようにやるか」という活動内容を考えて決定し、航空券・宿泊の手配、現地の人びととの連絡・交渉なども行っていることである。一方、コーディネータは、企画段階での現地の人々への依頼や、企画への助言、英会話の訓練、通訳、レンタカーの運転をするのみである。このため、学生にとっては、自分たちの力で海外に行き活動できる「人間力」の育成に効果があったと思われる。また、海外に出ることに対して積極性が生まれ、交流の場面での必要性から英会話力を高めることへの意欲も増した。ただ、言い換えれば、英会話力にはまだまだ課題があるという

ことである。

さらなる課題は資金面である。前述したようにこのハワイ・プロジェクトは、まだ発足して4年であり、メンバーの人数は最大で15名であった。したがって、2016年度もカテゴリーは「準公認」のままであり、大学からの補助金はすべての活動で合計100万円である。主な支出である渡航費（航空券代金および宿泊費）について、海外系プロジェクトの場合、参加のメンバー一人当たり一律5万円プラス5万円を超える額の6割が大学から援助される。しかし、参加者全員の合計が100万円を超えることはない上に、他の活動の費用も確保されている。もっとも最近の渡航である2017年3月の場合、航空券代金だけで一人当たり約12万円かかっており、一人当たりの援助資金は約9.2万円であった。したがって学生たちにとって、その差額に加え、宿泊費、食費、現地の移動費（レンタカーにかかる経費）などが自己負担分としてのしかかることになる。このことが、渡航者自身だけでなく新たなメンバーの勧誘においてモチベーションの低下につながるものが懸念される。

また、このハワイ・プロジェクトを海外体験学習として捉え評価する場合、渡航期間中のみをその対象とするのではなく、企画書の作成から審査会でのプレゼンテーション、活動の準備、活動報告会まで、そして大学祭等での発表、写真展の開催なども含めて行うのも特徴であり、他の海外体験学習との相違である。

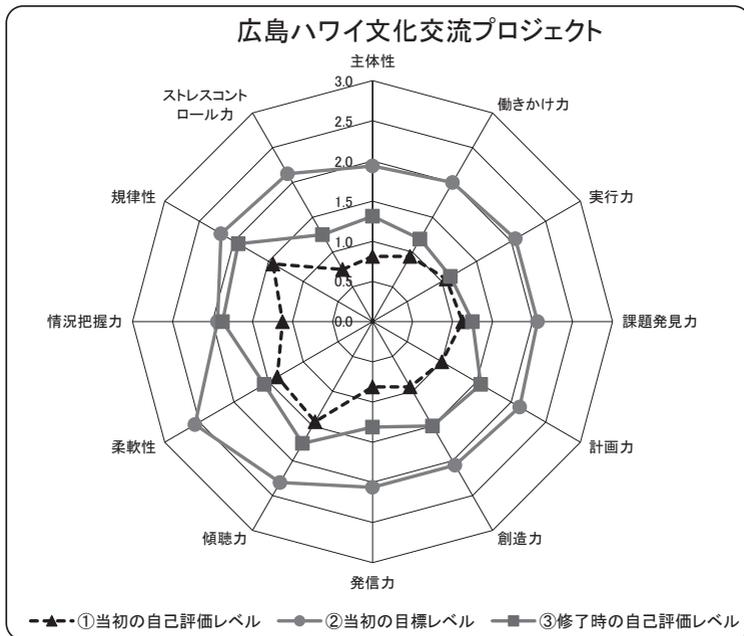
#### 4. プロジェクトの評価について

「興動館教育プログラム」では、平成20年に経済産業省が公募した「体系的な社会人基礎力育成・評価システム開発・実証事業」に応募し、採択されたのを機に、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」と定義した「社会人基礎力」を取り入れ、本学オリジナルな「プログレスシート」を開発し、「人間力マップ」と呼ばれる、学生の成長度を定量的に評価するシステムを構築し運用している<sup>4)</sup>。

そこでは、社会人基礎力の12の能力要素それぞれを、知識・経験・行動レベルを0から3までの4段階のルーブリックで表し、学生は0.5刻みで0から3までの7段階で、当初の自己評価レベル、当初の目標設定レベル、修了時の自己評価レベルを記入したうえで、教職員コーディネータの他者評価を加え、客観的定量的に評価し、さらに、レーダーチャート化することにより、自らの成長を可視化することができるようになっている。この評価システムを通じて、学生は社会でどのような能力が求められているのか、そして自分がどのレベルにあるのかを認識できるようになった。また、各プロジェクトの特徴もその評価から読み取れる。

以下は、2015年度ハワイ・プロジェクトのメンバーのうち、渡航した8名が記入したデータの12の能力要素の平均値をまとめ、レーダーチャート化したグラフとその数字である。

2015年度ハワイ・プロジェクトの評価



ハワイ・プロジェクト	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレスコントロール力	全体平均
①	0.8	0.9	1.1	1.1	1.0	0.9	0.8	1.4	1.4	1.1	1.4	0.8	1.1
②	1.9	2.0	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.3	2.6	1.9	2.2	2.1	2.1
③	1.3	1.2	1.1	1.3	1.6	1.5	1.3	1.8	1.6	1.9	1.9	1.3	1.5
③/①	162%	127%	106%	111%	156%	160%	162%	122%	114%	167%	135%	167%	138%
③/②	68%	59%	55%	61%	74%	73%	64%	76%	61%	97%	89%	59%	69%

※①：年度当初の自己評価レベル，②：年度当初の目標レベル，③年度修了時の自己評価レベル，③/①：伸長率，③/②：目標達成率

※①，②，③は小数点第2位以下を四捨五入しているため，伸長率・目標達成率は同数値でも異なる場合がある。

※表の中で，網掛けになっているのは特に特徴的だと思われる数字。

次に，ハワイ・プロジェクトの評価と比較検討のため，全15の「興動館プロジェクト」の評価の平均値を提示する。

2015年度興動館プロジェクト全体の評価

興動館プロジェクト全体	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレスコントロール力	全体平均
①	1.1	1.1	1.2	1.2	1.2	1.1	1.0	1.5	1.3	1.3	1.5	1.3	1.2
②	2.1	2.1	2.1	2.2	2.1	2.1	2.1	2.3	2.2	2.2	2.3	2.2	2.2
③	1.6	1.5	1.6	1.5	1.5	1.5	1.4	1.8	1.7	1.7	1.8	1.6	1.6
③/①	145%	131%	129%	124%	128%	136%	141%	118%	125%	129%	119%	127%	129%
③/②	75%	71%	74%	71%	71%	71%	67%	77%	74%	76%	78%	73%	73%

## 5. 考察

ハワイ・プロジェクトの評価については、渡航したプロジェクトメンバーの平均値ではあるが、以下のようなことが言えるだろう。

- (1) 12の能力要素を総合した年度当初の自己評価レベルは1.1であるのに対し、年度終了時の自己評価レベルは1.5となっており、渡航メンバーたちはかなり伸びたと感じている（伸長率：138%）のである。
- (2) 12の能力要素のうち伸長率が高いのは「状況把握力」と「ストレスコントロール力」が同率で167%、次いで「主体性」と「発信力」が同率で162%となっている。海外へ行く場合、自ら情報を把握していかないと自分が窮地に陥ることもあるし、プロジェクト内のメンバーあるいはコーディネータや現地関係者に対し積極的に発信していかないと活動できないのは当然のことであろう。また、一方で、海外で活動するのはストレスフルであり、そのコントロールに力を要したこともうなずける。
- (3) 一方、12の能力要素のうち伸長率が低いのは「実行力」と「柔軟性」と「課題発見力」であることは、海外での活動が予定したとおりにうまく運ばずにトラブルになることもありがちで、その際に柔軟に方向を変えたりして対応したり、トラブルの原因を把握することが難しくなりがちであったりしたことも反映しているようである。
- (4) 目標達成率は全体で69%、高い要素上位2つがとびぬけており、「状況把握力」で97%、次いで「規律性」89%となっている。海外で団体活動を行う場合は、活動の開始時間や集合時間など、互いに時間を守ることが最重要であることからうなずける。

以上分析したように、「興動館プログラム」全体と比較して、海外系プロジェクトであることの特徴がよく表れている。ただし、認識しておかなければならないのは、この評価がハワイへの渡航における活動だけのそれ

ではない点である。3. (1)～(4)で述べたように、学生たちは、6月から3月まで足掛け10か月をかけて、渡航するための企画・準備、および成果報告を、行っている。つまり、単純に「海外体験だけ」の評価ではないのである。

「海外体験学習」を評価する際に、渡航中の活動についての評価だけでよいのか、あるいはその渡航中に様々な活動を行うための企画・準備や、次年度に向けての指標にするための活動報告まで含めるのかは、議論の分かれるところだと思う。しかし、少なくとも、企画・準備については、「海外体験」がうまくゆくようになされるのであり、その一部と考えるのが、妥当であろう。また、自己評価においては、評価の度合いが定量的に示される必要があることと、それぞれに適したルーブリックが有効であることも示されたと思う。

## 注

- 1) 例として、2015年12月に開催された「大学における海外体験学習研究会」で発表された大阪大谷大学、明治学院大学、同志社女子大学、2016年9月に開催された「第24回グローバル教育学会」で発表された中央大学などがある。中央大学文学部の森茂岳雄教授の授業「グローバル・スタディーズ」の中で行われたものがあるが、これについては、以下の文献を参照。  
森茂岳雄・津山直樹「ハワイ日本人移民の教材づくりに関する海外スタディツアーの教育的意義—物語論的アプローチによる大学生の自己変容プロセスの分析を通して—」『海外移住資料館 研究紀要』第10号、2015。
- 2) 藤原孝章「海外体験学習の現状と課題—スタディツアーが創る学びの構造と評価」『第24回グローバル教育学会発表要旨集録』34～35頁。
- 3) 「興動館教育プログラム」については、本学ホームページの興動館のページを参照。<http://www.hue.ac.jp/koudoukan/index.html>
- 4) 「人間力マップ」のうち、ルーブリックの部分をあけておく。

12の能力要素	知識、スキル・行動 【レベル0】	対象となる能力要素について、あまり意識したりしたことがない、これまででもあまり経験がないレベル	知識・スキル・行動【レベル1】 「少し思う、時々できてくる」=0.5 「そう思う、日常的にできている」=1.0	知識・スキル・行動【レベル2】 「少し思う、時々できてくる」=1.5 「そう思う、日常的にできている」=2.0	知識・スキル・行動【レベル3】 「少し思う、時々できてくる」=2.5 「そう思う、日常的にできている」=3.0
主体性	物事に進んで取り組みむ力	○自分が生きることの意味や具体的な目標などはあまり考えたことがない	○対象となる能力要素について、ある程度意識している。また、過去の人生(日常、学校生活、課外活動、その他)において、経験をしていたり知識を得たりしているレベル	○対象となる能力要素について、社会人として必要な意識や能力を持っている。会社や組織などに入っても、上司や同僚からの指示待ちだけでなく、積極的にも動けるレベル	○対象となる能力要素について、社会人として必要な意識や能力をかなり高いレベルで持っている。会社や組織などに入っても、上司や同僚から信頼できる、頼りになると思われるようなレベル
働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	○他者への積極的な働きかけなどがない	○他者の体験談や双方向の対話などを通じて、自分が生きることの意味を考える ○自分の長所を発見する、意識する	○自分の長所を発見する、伸ばすことができる ○自分なりの生き方を表現する 例(何かを始めた時、生活・行動を変えたりする)	○自分の長所を再発見、やりたいたいこと、やるべきことを発見する ○やるべきことを行動計画として表現できる
実行力	目的を設定し、確実に行動する力	○特にこれといった目的、目標などは持っていない、あまり考えない	○いろいろな場面ごとに目的や目標を設定できる	○目的や目標達成のために何をすべきか考え行動できる 例(やるべきことを書き出した時、順序付けられる)	○現地調査や学外関係者との共同事業等において、計画の実行のために周囲を巻き込み、解決策を提案したり実際に解決できる。例(年長者や外部関係者と交渉したり、依頼、説得したりできる)
課題発見力	現状を分析し、目的や課題を明らかにする力	○現象や日常において、問題意識をもち、原因を深く考えることは少ない	○日常的に何が問題で、課題は何かという目で物事をみることができる	○問題を分析する基本的な考え方や手法が身に付いている ○直面した時、与えられたテーマに対して、自分なりの改善策や解決策を見出すことができる	○問題を特定し、課題解決のための仮説づくりができる ○仮説を改善、検証するためにやるべきことがわかる
計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	○物事に取り掛かる前に、使う時の規定やどんな手順が適切かなどの検討はあまりしない	○やるべきこと、依頼されたことへの目標を達成するために必要な行動項目を列挙できる	○やるべきこと、依頼された目標に対して、具体的な計画を描いて、他者にも連携しながら行動できる	○他者と連携しながら、改善ややるべきことのプロセスや阻害要因を特定した計画作り、実行ができる

